2008年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書

記入日 2009年 1月 19日

1．概 要

実践団体名	摂南大学ボランティア・スタッフズ		
連絡先	072-839-9359		
プランタイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー		
プランの対象者	中学生、高校生	対象とする災害種別	地震

【プランの目的・ここがポイント！】

摂南大学ボランティア・スタッフズが、自ら防災教育を学び、学生ファシリテーターとなって中高生に対して、「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」を実施し「災害時には自分の命は自分で守る。」という原点に立ち、災害が発生した時の対応、行動を座学と実践で経験し、家族や地域の人々を助ける知識を習得するユニークな活動です。

【プランの概要】

参加者一人ひとりのリーダーシップを伸ばし、何事にも主体的にチャレンジするリーダー的意識を育む活動やセミナーを行いました。地震などの自然災害に対して平時から自分たちの住む地域にどのような危険と問題があるかをよく理解し、その状況に応じて自主的に対応ができるようにしました。日頃知っているつもり、あるいは大丈夫だと思っていることが、身に付いていないことを認識し、それが非常に大切なことだという意識を育ませました。また、減災という視点から、自分たちの生命に関わる被害が少しでも軽減できるよう、家庭をはじめ地域の災害現場において実際に役に立つ知識と技術が発揮できるような実践的な活動を１年間を通じて体験することで災害に備えています。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

1年間に12回のセミナーとワークショップを開催しました。参加者や、学生ファシリテーター自身が防災教育に関する様々な環境や機会を与えられたことで、「気づき」が生まれ、「気づき」が「やる気」に変化し、「やる気」が積極的な「行動」に発展しました。毎回PDCAを行い、ポートフォリオによる成長記録を実施しました。仲間を信頼して難局に立ち向かうチャレンジ精神と、各自のリーダーシップ、「報告・連絡・相談」の重要性を身につけました。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書

2．プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
2008年6月	セミナー開催（寝屋川市立エスポアール）：活動スキル、日ごろの備え（家具固定）、災害復旧支援スキル	6月までに既に4回のワークショップ・セミナーを実施した。	2008年3月を起点に年間12回のワークショップ・セミナー実施を計画した。
2008年7月			
2008年8月	8月6･7･8日　指導訓練（和歌山県） 8月23･24日　セミナー開催（寝屋川市立明徳小学校体育館）	和歌山市教育委員会との打ち合せ、現地準備 寝屋川市教育委員会・青年会議所との打合せ	● 内容：簡易避難所設営・ブルーシートテント設営・簡易トイレ設営・サバイバル食 ● 内容：避難所設営・避難所マネジメント・避難所体験宿泊・避難生活体験
2008年9月	9月13･14･15日　孤立体験・サバイバルキャンプ実施（和歌山県）	和歌山市教育委員会・寝屋川市教育委員会・青年会議所との打合せ	● 内容：災害を想定した「孤立経験」「避難所生活体験」「避難所運営体験」「災害時の危険要因想定」をさせる。災害地で生きるサバイバル術を体験。
2008年10月	10月25日　セミナー開催（いきいき文化センター）	寝屋川市教育委員会・青年会議所との打合せ	● 内容：身の回りの材料を使ったサバイバル食・非常食の調理、グループワーク
2008年11月	11月3日　セミナー開催（摂南大学）	大阪府危機管理室との打合せ	● 内容：DIG 災害図上訓練
2008年12月	12月13日　セミナー開催（アクトパル宇治野外活動センター）	寝屋川市教育委員会・青年会議所との打合せ	● 内容：PCM 講座、災害時のリスクマネジメントスキル、リーダーシップ、
2009年1月	1月16日　大阪府地震災害訓練　淀川点野緊急船着場（摂南大学から徒歩５分の場所）活用訓練	大阪府・日本防災士協会大阪支部・地元自治会・摂大ボランティアスタッフズ	● 地震による大規模災害を想定した船着場を活用した物資等の水上輸送検証

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム①】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー①
実施月日（曜日）	3 月 20 日（木）　春分の日
実施場所	いわふね自然の森スポーツ文化センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムのカテゴリ、形式	ワークショップ
活動目的	防災に役立つ体験
達成目標	7 種類のロープワークを習得する
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	・　アイスブレーキング ・　基本的なロープワーク ・　ロープワークの応用 ・　ロープワークを使った、緊急救助方法
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティア・スタッフズ ・　道具：ロープ
参加人数	40 名
経費の総額･内訳概要	自費　（防災教育チャレンジプランの経費を使っていない）
成果と課題	【成果】7 種類のロープワークについて習得した 【課題】状況に応じたロープの使い方に難がある
成果物	特になし

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム②】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー②
実施月日（曜日）	3 月 22・23 日　（土・日）　一泊二日
実施場所	和歌山県　友ケ島
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 10 時
プログラムの　カテゴリ、形式	講習会
活動目的	災害を想定した訓練の踏査
達成目標	セミナー本番に向けた現地状況の把握
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	9 月に実施するサバイバルキャンプの事前踏査： ・　水の確保方法確認 ・　緊急時の病院や輸送手段の確認、 ・　ブルーシートテントの試作 ・　簡易トイレ試作
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	人材：ボランティアスタッフズ 道具・材料：サバイバル用品一式
参加人数	5 名（参加者のリーダー的存在）・ボランティアスタッフズ 15 名
経費の総額･内訳概要	自費（防災教育チャレンジプランの経費を使っていない）
成果と課題	【成果】現地の状況を把握できた 【課題】機材運搬に時間がかかる
成果物	特になし

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム③】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー③
実施月日（曜日）	4 月 27 日（日）
実施場所	アクトパル宇治野外活動センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムの　カテゴリ、形式	ワークショップ
活動目的	災害を想定した訓練
達成目標	ブルーシートテントの試作、簡易トイレ試作
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	セミナー開催に向けて事前に、ブルーシートテントの試作、簡易トイレ試作して、課題と改良点を見つけ出す。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：ブルーシート、紐、スコップ
参加人数	5 名（参加者のリーダー的存在）・ボランティアスタッフズ 15 名
経費の総額･内訳概要	自費（防災教育チャレンジプランの経費を使っていない）
成果と課題	【成果】簡易なものは製作が可能となった 【課題】ブルーシートの耐久性に問題があることが判明した
成果物	特になし

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム④】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー④
実施月日（曜日）	5 月 10・11 日　（土・日）　1 泊 2 日
実施場所	アクトパル宇治野外活動センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムの　カテゴリ、形式	セミナー
活動目的	災害を想定した訓練
達成目標	簡易避難所設営・ブルーシートテント設営・簡易トイレ設営
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	・　グループワーク ・　簡易避難所設営（大型テント） ・　野外炊飯 ・　ブルーシートテント設営 ・　簡易トイレ設営 ・　ハイゼクスによる炊爨
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：ブルーシート、紐、スコップ、ハイゼックス
参加人数	40 名
経費の総額･内訳概要	自費（防災教育チャレンジプランの経費を使っていない）
成果と課題	【成果】決められたシナリオ通りに計画が進むようになった 【課題】グループワークの時に、目的の１つとしている「協力」する態度について課題が残る
成果物	特になし

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑤】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑤
実施月日（曜日）	6 月 21 日（土）
実施場所	寝屋川市立エスポアール
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムの　カテゴリ、形式	セミナー
活動目的	災害を想定した訓練
達成目標	座学による知識向上
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	セミナー内容（座学）：活動スキル、日ごろの備え（家具固定）、災害復旧支援スキル
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ
参加人数	20 名
経費の総額･内訳概要	特になし。
成果と課題	【成果】これまで学んできたことを復習することができた 【課題】座学のセミナーになると、参加者が減ってしまう。
成果物	写真参照

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑥】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑥
実施月日（曜日）	8月6・7・8日　（金・土・日）
実施場所	南紀白浜海岸
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午後5時～午後11時
プログラムのカテゴリ、形式	セミナー
活動目的	災害を想定した訓練
達成目標	夜間に自然災害が発生した場合の行動範囲確認
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	指導訓練 夜間に自然災害が発生した場合を想定し、行動範囲確認 確認内容： ・　簡易避難所設営 ・　簡易トイレ設営 ・　サバイバル食
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：ブルーシート、紐、スコップ、ハイゼックス
参加人数	30名
経費の総額･内訳概要	交通費　114,600円
成果と課題	【成果】想定された範囲内の行動をすることが確認できた 【課題】最悪条件（夜・雨・冬）に被災した場合、何も出来ないことが考えられる。
成果物	特になし。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑦】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑦
実施月日（曜日）	8 月 23・24 日
実施場所	寝屋川市立明徳小学校体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 10 時
プログラムの　カテゴリ、形式	ワークショップ
活動目的	避難所体験宿泊・避難生活体験をさせる
達成目標	マネジメント能力・結束力・リーダーシップの向上
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	被災者が宿泊する避難所での活動を想定し、マネジメント能力・結束力・リーダーシップの向上を目指す。 ・グループワーク ・避難所司令部設置 ・避難所宿泊所を設置 ・避難所炊飯を実施 ・避難所仮設トイレを設置
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：ブルーシート、紐、ハイゼックス ・　大型テント
参加人数	40 名
経費の総額･内訳概要	大型テント　300,000 円
成果と課題	【成果】自分が被災者になったら、何が必要か、どう生活したら良いのかを実体験することができた。 【課題】疑似体験では、緊迫感を醸し出すことは非常に難しい。
成果物	特になし。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑧】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑧
実施月日（曜日）	9 月 13・14・15 日
実施場所	和歌山市立少年の家
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 8 時～午後 10 時
プログラムのカテゴリ、形式	セミナー
活動目的	孤立体験・サバイバルキャンプ実施
達成目標	これまで実施してきた活動を災害を想定した孤立体験で活かす
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	大規模な被災を想定し「孤立経験」「避難所生活体験」「避難所運営体験」「災害時の危険要因想定」を実体験させ、災害地で生きる伸びるサバイバル術を活用する。２泊３日の活動で、①テント生活、②自炊、③炊き出し、④水の確保、⑤衛生問題、⑥仲間との協調性、⑦リーダーシップ、⑧夜間行動の危険性体験、⑨緊急救護、⑩ロープワーク、⑪コミュニケーションスキル、⑫集団行動、⑬孤立体験など多くの項目について実施した。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：ブルーシート、紐、ハイゼックス、大型テント、本部用テント、野戦病院用テント、ロープ、トランシーバー
参加人数	４０名
経費の総額･内訳概要	講師謝金　25,000 円
成果と課題	【成果】想定した項目はすべて実施することができた。 【課題】７２時間の孤立体験は非常に有意義であったが、疑似体験では、緊迫感を醸し出すことは非常に難しい。
成果物	特になし。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑨】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑨
実施月日（曜日）	10 月 25 日
実施場所	いきいき文化センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムの　カテゴリ、形式	セミナー
活動目的	都市災害に被災したらどう生活するかを考える
達成目標	「何もない、何もできない」からの脱出
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	自宅で大規模災害（地震）に被災した場合を想定し、何が必要で、どう対応したら良いかを考えさえる。商品化したサバイバル商品ではなく、身の回りのものを使って、自宅でサバイバルする方法や、自宅内に危険個所を事前に知り、災害に備える。 ①　自宅の危険個所再発見 ②　自宅内での対処方法を考える ③　缶詰を使った、サバイバル食の調理
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具、材料：参加者が自宅から３つの缶詰を持ち合った。
参加人数	２５名
経費の総額･内訳概要	特になし。
成果と課題	【成果】自分が住む、自宅での危険個所に気付かせることができた。 【課題】座学形式のセミナーになると、参加率が低下することが非常に気になる。野外セミナーは参加率が高い。
成果物	特になし。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑩】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑩
実施月日（曜日）	11 月 3 日
実施場所	摂南大学寝屋川キャンパス
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前 9 時～午後 5 時
プログラムのカテゴリ、形式	セミナー
活動目的	都市災害を想定した、災害図上訓練（DIG）
達成目標	自分たちが住む地域の危険地帯や危険性を知る
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	図上訓練は、災害発生時において、その応急対策について一人一人が役割を実践することで、対応すべきことを習得するものである。 1.　ロールプレイング 2.　自然条件確認 3.　都市構造確認 4.　「我まち」の災害に対する強さ弱さの理解 5.　災害に強いコミュニティーをどうやって作っていくか
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ ・　道具・材料：白地図、マーカー
参加人数	４０名
経費の総額･内訳概要	講師謝金 25,000 円（ただし、白地図や DIG 用品の材料費として）
成果と課題	【成果】都市災害における危険性について学ぶことができた。 【課題】DIG においては、地図を読む力、地図から危険を察知する力がなければ、DIG の効果が少ないと感じた。
成果物	写真参照

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑪】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑪
実施月日（曜日）	12 月 23・24 日　（火・水）
実施場所	アクトパル宇治野外活動センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前９時～午後９時
プログラムのカテゴリ、形式	セミナー
活動目的	災害図上訓練を受けて、それを展開させたリスクマネジメント
達成目標	災害図上訓練を一歩先に進ませる
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	災害図上訓練を受け、様々な課題が浮き彫りになった。そういった課題についてどう対処したら良いのかを考える PCM 講座、リスクマネージメントスキル、リーダーシップのセミナーを行った。 1. 課題抽出 2. 自分たちでできることを考える 3. 今後、自分たちは何をすべきかを考える 4. ファシリテーターの役割を考える
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・ 人材：ボランティアスタッフズ ・ 道具、材料：紙、マーカー
参加人数	３５名
経費の総額･内訳概要	交通費 114,800 円　施設使用料　87,200 円
成果と課題	【成果】住民の目線になって考えることができた 【課題】行政がどこまで関与するかわからないことから、行政には頼らず、住民がどこまでできるか？が課題となった。
成果物	特になし。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑫】

タイトル	災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー⑫
実施月日（曜日）	１月１６日
実施場所	淀川点野緊急用船着場　（摂南大学から徒歩で５分の場所）
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：浅野英一 所属・役職等：摂南大学外国語学部　准教授　（ボラスタ顧問）
所要時間または「コマ数×単位時間」	午前９時～午後２時
プログラムのカテゴリ、形式	その他
活動目的	地震による大規模災害を想定し、淀川緊急用船着場を活用した物資等の水上輸送検証
達成目標	物資等の水上輸送がマニュアル通りに進むかの検証
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	大阪府地震災害訓練の一環として、大阪府、摂南大学ボランティア・スタッフズ、大阪府トラック協会、日本防災士会、大阪水上安全協会、中之島まちみらい協議会、地元自治会、近畿地方整備局などが参加し、淀川を使った緊急船着場活用訓練を実施した。摂南大学ボランティアスタッフズは、本訓練の企画段階から参画し、大規模な都市災害での減災計画に積極的に取り組んだ。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　人材：ボランティアスタッフズ
参加人数	平日であるため、ボランティアスタッフの３０名
経費の総額･内訳概要	
成果と課題	【成果】想定された訓練内容は確実に実施することができた。 【課題】物流された物品がそれほど多くないため、想定された時間内で可能であったが、本番でこれができるか、不安である。
成果物	写真参照

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	東京大学の物理学者である寺田寅彦先生は、「天災は忘れた頃にやってくる」という名言を残されました。寝屋川市は生駒断層帯の上にあり、想定マグネチュード７前後（建物倒壊率は 30%前後）の地震が発生すると予想されています。しかし、寝屋川市の近代史では、大自然災害の被災経験がなく、住民に「防災」をどう呼びかけて良いのか、防災教育をどう立案すべきか、まったく方向性が見えませんでした。この背景の中、被災経験のない学生ファシリテーターが、参加者、協力機関にどうやって「やる気」を起こさせるかが最も大きな課題でした。そこで、「命の大切さ」を起点とし、自分の身を守る方法や仲間意識を高めるといった、人間力成長を組み入れた取り組みとして１年間 12 回のセミナーを展開しました。
準備活動で苦労した点工夫した点	地域の青少年（平均参加者 40 名：中学生・高校生・二十歳までの青年）を対象にした活動であるため、寝屋川市教育委員会やＰＴＡとの連携が必要と考え、共同開催事業としました。特に、教育委員会は、公的な機関であることから役所式「上意下達」的な決定システムになっており、年間 12 回のプログラムを組んだことで、毎週のように準備会議がありました。プログラムに若干の内容変更が生じた場合でも、協議し、上部組織の意思を仰ぎ、それに従って再度協議するシステムに学生ファシリテーターたちは翻弄されました。プログラムの実施までに、学生ファシリテーターが教育委員会との協議で体力を消耗するといったことも何度かありました。これが準備活動で最も苦労した点であり、最大の難関であり、現在においてもこの点の解決方法が見つかっていません。ただ、学生ファシリテーターが「段取り」という大人の社会で必要な「仕組み」を理解し、最終的には「段取り良く」物事を進めることができるようになりました。
実践に当たって苦労した点工夫した点	① 参加者に対して、防災教育を行ううえで、学生スタッフ自身が、防災や減災の知識や実践力を付けなければなりませんが、大学には防災の専門家もおらず、資料もありません。そこで、大阪府庁や寝屋川市役所の危機管理室の担当者から、様々な講習（例えば、図上訓練ＤＩＧ）を受け、それを自分たちで理解したのちにセミナーを実施しました。 ② 参加者は、寝屋川市内の全中学校・高校の生徒を対象として募集しており、参加者の出身校が異なっています。各地域から、参加者を募ることは、非常に良いことですが、各学校の公式行事（運動会・中間テスト・期末テスト・文化祭）の日程が異なっており、本プログラムの日程設定が非常に困難でした。そこで、12 回のセミナーは連続した内容ではなく、主活動の他に以前と良く似た内容の活動をところどころで重複させるように工夫しました。 ③ 野外活動セミナー（参加率 90%）と座学セミナー（参加率 55%）に大きな開きがありました。そこで、座学タイプのセミナーであっても、体を動かす活動的な内容に導入し、参加率の向上を目指しました。（10%の向上があった）

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	寝屋川市教育委員会	広報活動、施設利用、寝屋川市役所所有の中型バス利用、セミナー材料の提供
保護者・ＰＴＡの組織	寝屋川市立校園 PTA 協議会	広報活動支援
地域組織	寝屋川市自治会	防災に関する、自治会取り組み情報提供
国・地方公共団体・公共施設	寝屋川市役所危機管理室 大阪府庁危機管理室	学生スタッフの研修、危機管理に関する情報、資料の提供、合同訓練実施
企業・産業関連の組合等	日本防災士協会大阪府支部	危機管理に関する情報、資料の提供
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	社団法人　寝屋川青年会議所	広報活動、セミナー実施に関する材料提供
職業、職能団体・学術組織、学会等		

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	被災経験のない学生ファシリテーターが、被災経験のない「セミナー参加者」、「協力機関、行政、教育委員会」に対して、防災教育の重要さをどうやって認識させ、「やる気」を起こさせるかが最も大きな課題でした。「命の大切さ」から出発し、防災教育セミナーやワークショップを 1 年間（12 回）継続的に重ねる過程で、この活動を地元ケーブルテレビに紹介しました。それが起点となって様々なメディア（全国紙）に取り上げられるようになりました。学生ファシリテーターや中高生が、「自分の住む街を守る」という直向きで純粋な活動の映像がテレビで流れ、大きな反響となり、寝屋川市役所だけでなく、大阪府庁からも相互連携の協力関係を結んでいきたいとの要請が届くまでに大きな展開になりました。成果として地域の人々に「防災・減災」に対する認識を芽生えさせることができました。各種のメディアに取り上げられることで、「参加者」や「協力機関、行政、教育委員会」だけでなく、学生ファシリテーターのモチベーションが向上し、防災教育活動に励みが増しました。
全体の反省・感想・課題	参加者の約 6 割は、すべてのセミナーに参加したという経験を持っています。本活動は、参加者と学生ファシリテーターの成長記録（ポートフォリオ）を毎回記録しており、レーダーチャート・データによって比較すると 1 年間で知識・行動力・責任感に特段の成長が見られます。将来的に「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」は、摂南大学ボランティア・スタッフズが主体になってやるものではなく、このセミナーの参加者（修了者）が主体となって行う活動であるべきです。この認識を参加者に植え付けることができたか？という視点では、まだまだ課題が残されています。活動が中学生や高校生を対象としていることから、教育委員会との共催にしましたが、現実的には、役所式の上意下達システムに振り回された 1 年であり、共催したメリットより、時間的ロスのデメリットのほうが大きかったです。
今後の継続予定	「継続は力なり」という言葉通り、継続的に実施した月 1 度のセミナーによって、参加者も学生ファシリテーターも人間的成長や、防災に関する知識、行動力に大きな成長がありました。本活動は、寝屋川青年会議所の協力を得て 3 年前から継続的に実施しており、本年度だけで終了するものではありません。本年度は、大きな資金的援助が防災教育チャレンジプランからあり、高額な必需品を買い揃えることができました。自前の機材があることで、次年度以降は本年度より、低い予算で活動の継続が可能になりました。参加者の「やる気」「モチベーション」「活動力」を今後も発展的に維持するため、新しい参加者や、新しい学生ファシリテーターを加えながら、次年度以降も「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」を実施していきます。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

7．自由記述欄　①

災害列島といわれる日本では、地震などの自然災害の発生は避けられず、災害に立ち向かう様々な努力は終わることのない役割です。一人ひとりが、自分の命は自分で守る、地域は地域で守るという考え方のもとに活動を進めることで、大災害に被災したときに被害を最小限にすることが可能と考えられます。寝屋川市は生駒断層帯の上にあり、想定マグネチュード７前後（建物倒壊率は 30%前後）の地震が発生すると予想されています。しかし、寝屋川市の近代史では、大自然災害の被災経験がなく、住民に「減災」をどう呼びかけて良いのか、防災教育をどう立案すべきか、まったく方向性が見えませんでした。そんな背景の中、被災経験のない学生ファシリテーター、参加者、行政にどうやって「やる気」を起こさせるかが最も大きな課題でした。「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」は、本年度だけの取り組みではなく、3 年前から継続的に行っている取り組みです。「命の大切さ」を起点とし、自分の身を守る方法や仲間意識を高めるといった、人間的な成長も視野に入れて展開してきました。

防災教育チャレンジプラン「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」では中・高生・青年の参加者一人ひとりのリーダーシップを伸ばし、何事にも主体的にチャレンジするリーダー的意識を育む活動やセミナーを実施しました。地震などの自然災害に対して平時から自分たちの住む地域にどのような危険と問題があるかを良く理解し、その状況に応じて自主的に対応ができるようにしています。これは日頃知っているつもり、あるいは大丈夫だと思っていることが、身に付いていないことを認識し、それが非常に大切なことだという意識を育むませることを目的にしています。「命の大切さ」を起点に、「自分の命は自分で守る。」という視点に立ち、災害が発生した時の対応、情報収集などを学習し、家族や地域の人々を助ける知識を得ることで災害が発生した時に、公的な支援の到着が遅れるという現実（概ね７２時間：３日間）に対応して、自分たちの生命に関わる被害が少しでも軽減できるよう、家庭をはじめ地域の災害現場において実際に役に立つ知識と技術が発揮できるような実践的な活動することで災害に備えています。

摂南大学ボランティア・スタッフズの学生ファシリテーターは、防災教育の専門家ではありません。大学の授業に、防災に関する講義もありません。多くの学生ファシリテーターは、教職課程を履修しており、将来的には小学校、中学校、高校の教壇に立つ予定です。義務教育の中に、防災教育も何がしかの形で含まれているものの、学校内における集団的な防災訓練です。将来、学校の教壇に立つ先生の卵たち（学生ファシリテーター）が、自主的に防災教育を学び、そして実践していく過程には、様々な壁がありました。準備段階で、共催している寝屋川市教育委員会との共同作業のなかで、上意下達という役所式システムに翻弄され、膨大な時間を打ち合わせに消費し、活動前夜には、体力が消耗していたという状況も何度かありました。将来、学校の教壇に立つ先生の卵たち（学生ファシリテーター）は、教育現場や社会人に必要な「段取り」を直接学ぶことができたことは、大きな収穫となりました。また、参加者に対して、防災教育を行ううえで、学生ファシリテーター自身が、防災や減災の勉強をしなければならず、その為に独立独歩で様々な資料を調査し、実践に向けての試行錯誤が「気づき」「やりがい」「モチベーションの維

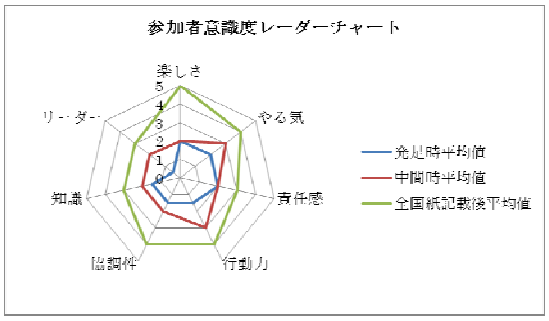
2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

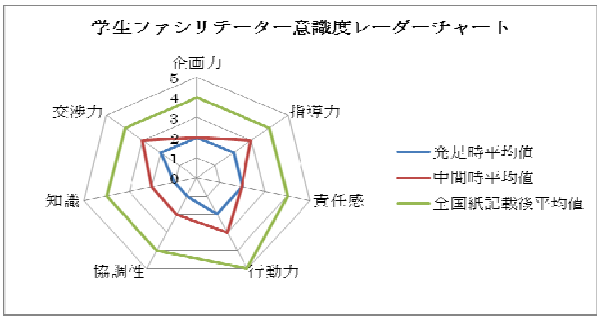
7．自由記述欄　②

持」につながりました。大阪府庁や寝屋川市役所の危機管理室の担当者から、様々な講習を受け、それを基礎に参加者用にアレンジして教えるものもありました（例えば、図上訓練ＤＩＧ：写真参照）。その中で、危機管理室の担当者が、「災害直後、役所や危機管理室は機能しない。最も、頼れるのは、常に災害を意識して活動している君たちだ。」と言った言葉が非常に印象的で、学生ファシリテーターの心に強く突き刺さり、活動にかける熱意が向上しました。こういった、熱心な活動が、地元のケーブルテレビで放映され、それを機会に全国紙（記事－１）に何度も取り上げられたことで参加者や学生ファシリテーターの活動に一層の活力を与えました。

「災害時に活動できる青少年ボランティア・リーダーの育成セミナー」は、参加者と学生ファシリテーターの成長記録（ポートフォリオ）をレーダーチャート・データ（表―１）として残しています。ポートファリオのデーターを分析すると、急成長した時期がマスコミに取り上げられた時点と相関した関係があることが判明しています。これは、活動したことが、たくさんの人によって評価されたという外部的な影響に大きく関わっていると思います。

表―１　参加者や学生ファシリテーターの成長記録（ポートフォリオ）





記事－１　全国紙による活動掲載

毎日新聞　2008年(平成20年)10月21日(火)　大阪　24

なにわアカデミー　22　摂南大学

地域の青少年リーダー育成

地震などの非常事態に備えて

心肺蘇生法など資格取得

毎日新聞

摂南大ボラスタに奨励賞

中高生に実地で知識伝える

ぼうさい甲子園

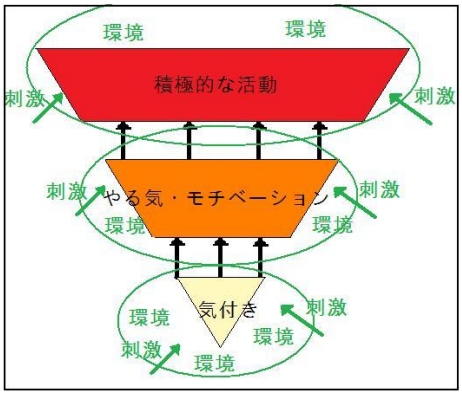
キャンプなど活動交え

阪神大震災（95年1月17日）から14年を迎えるのを前に、神戸市で11日開かれた「ぼうさい甲子園」（1・17防災未来賞）＝毎日新聞社、兵庫県など主催＝の表彰式で、奨励賞に選ばれた摂南大ボランティア・スタッフズ（ボラスタ）に賞状が渡された。【山田亮輔】

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

7．自由記述欄　③

「災害時に活動できる青少年ボランティア･リーダーの育成セミナー」では、全ての活動に関して、参加者と学生ファシリテーターの成長記録（ポートフォリオ）のデータを基に、Plan、Do,　Action、Check　といったPDCAサイクルを確実に行い、次への活動へとつなげたことが、



１つの大きな成功と考えています。昨年の３月から現在までに、1ヶ月１回の割合で１年間に12回のワークショップ・セミナーを継続的に開催したことで、参加者や、学生ファシリテーター自身が防災に関する様々な環境や機会を与えられ、「気づき」が生まれ、その「気づき」が「やる気」に変化し、「やる気」が積極的な「行動」に発展しました。最終的には、仲間を信頼して難局に立ち向かうチャレンジ精神と、各自のリーダーシップ、「報告・連絡・相談」の重要性を身につけました。「天災は忘れたころにやってくる、備えあれば憂いなし。」災害に対して意識することができる環境を作り、継続的に活動することで、防災や減災に一歩でも近づけることができると考えています。

教育委員会との打ち合わせ

学生ファシリテーターによるセミナー

図上訓練（DIG）セミナー

淀川緊急用船着場物資等の水上輸送検証